愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第38巻　第2号　187～197　1992

大学生のスポーツトレンドに関する研究

堺　賢治・相原順治*
（保健体育研究室）

（平成3年10月11日）

I．序　論

現在社会は豊かな社会であるといわれている。それに伴なって若者たちの行動様式も次のように変化してきた。[1)]

第一に経済的豊かさの進展は，現代の若者にも快適な生活をもたらしているが，一面においては，若者の意識や人間形成などの面において，物質主義的な風潮の中で物を大切にする意識を低下させている。また他者への思いやりや感謝の気持ちが弱まり，自己中心的な傾向が強まっている。

第二に情報化の著しい進展によって，現代の若者は知識を広げ，豊かな精神的，文化的生活を享受することが従来以上に可能になっている反面，これらの情報メディアへの若者の過度の依存は，心身への影響の面で，自然や人，あるいは社会との触れ合いの苦手な人間を形成しつつあるといえる。

第三に家庭環境の変化としての核家族化や少子化の進展は，経験豊かな高齢者との触れ合いや兄弟姉妹等の異年齢間の切磋琢磨の機会の減少などをひきおこしており，このような状況の下で，耐性や自主性が獲得されなかったり思いやりの心や社会性の基礎が培われずに育ってきた若者があらわれはじめている。

第四に地域社会の変化としての都市化の進展は，温かい人間関係の稀薄化や若者が自然と触れ合ったり，多人数で野外の遊びをする機会を減少させている。このような状況の下で，地域社会において相互の切磋琢磨による社会性や自己抑制力，人間関係を調整する能力などを十分に身に付けれずに育ってきた若者を生みだしてきている。

このように現在の若者は，その時代背景の変化によって，今までの若者とは違った感覚を抱いている傾向にある。これら前世代と違った新たな感覚を持つ若者を，特に前世代の人々は〝新人類〟[2) 3)] と名付けたのである。

このような現象は若者の代表たる大学生においても当然おこっており，社会の縮図として大学スポーツクラブを捉えるならば，スポーツクラブの中にも上記の現象が現われている。

そこで本研究は，若者の行動様式の変化に伴っておきてきているスポーツのトレンド[4)] に注目し、その中でも大学生のスポーツ活動に焦点をあて，第一に従来指摘されたきた「運動部離れ」の現象が現在どうなっているのか，第二に大学生の新しいスポーツの志向はどのようにな

*石井北小学校

っているかを大学生を対象に新人類と旧人類に分け明確にすることを目的にした。

Ⅱ．方　　法

調査対象：E大学1回生1157名
調査時期：1990年10月中旬
調査方法：質問紙による集合調査
回収率：有効回収数1137名
　　有効回収率98.3％
分析の視点
新人類は商品とサービスを選択する際の基準である「高級化・個別化・差別化」[5]の三条件を満足させることを厳しく要求するという仮説に基づいて，新人類の代表的な行動パターンである「高級化・個性化・差別化」という三つのキーワードについて10の質問項目を用意した。

〔高級化〕
(1)　「もったいない」と思わない
(2)　少々高くても高級なものがほしい
〔個性化〕
(3)　人から命令や規制を受けるのは好きではない
(4)　集団のことより自分のことを先に考える
(5)　「つきあい」はあまり好きではない
(6)　自分の個性を主張したい
(7)　いつも自由でいたい
(8)　何事もマイペースでいきたい
(9)　自分の好みを何よりも優先したい
〔差別化〕
(10)　他人と違うことをしたい

これらの質問に対してはすべて5段階にランクづけされた回答（①まったくそのとおりだと思う－1点，②どちらかというとそう思う－2点，③どちらともいえない－3点，④どちらかというとそうは思わない－4点，⑤ぜったいにそうは思わない－5点）を用意した。
合計点の分布によって合計点の低い者10％をA群（21点以下）し，高い者10％をB群（32点以上）とし，A群を新人類的意識をもったグループ（以下新人類という）とし，B群を旧人類的意識をもったグループ（以下旧人類）とした。
さらに，A群とB群の差異をより明確にするために，男子のみ（A群－89名，B群－87名）に限定して分析した。

Ⅲ．結果及び考察

1．スポーツ活動と意識

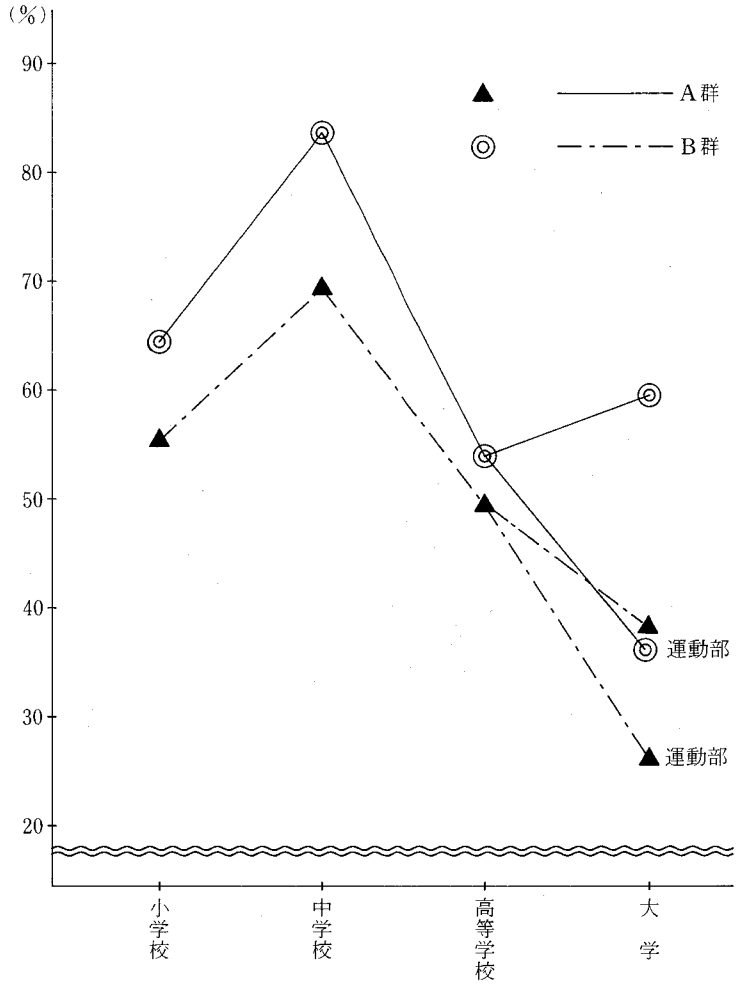

図1　スポーツクラブ歴

1）スポーツクラブ歴

図1は小学校（スポーツ少年団，運動部），中学校（運動部），高等学校（運動部），大学（運動部，同好会）におけるスポーツクラブ加入率の推移を表わしたものである。

小学校では約6割が加入し，両者の比較ではBの人の方が10%位よく加入している。

中学校では運動部への加入がピークになり，Bの人は83.9%，Aの人は69.7%とBの人の方がよく加入している。

高校に入ると加入率は両者とも50%前後に大幅にダウンし，両者ともあまり差はみられない。この理由としては，運動部の技術レベルが上がったことや大学進学を控えての受験勉強に追いまくられるなどの理由で加入率のダウンがあらわれたものと思われる。

大学でのスポーツクラブ加入率において，Bの人は59.8%と高校時代よりも増加しているが，Aの人は37.1%と12.4%も加入率が減少しており、「スポーツクラブ離れ」をおこしている。

運動部加入率をみるとBの人は36.8%，Aの人は27.0%と両者とも「運動部離れ」がおこっ

ているといえる。その理由としては小・中・高校までのスポーツクラブの指導に問題があるといえる。指導者の勝利至上主義による指導によって，中・高校時選手がバーン・アウトをおこしたり，勝利を目標とした過度の練習によってスポーツ傷害をおこすことなどが大学での「運動部離れ」の原因になっているものと思われる。また新人類の特徴である「しんどいことはしたくない」「人間関係はあまり得意でない」ことなどが今までの運動部特有のタテ社会（一年奴隷，二年平民，三年天皇，四年神様）の体質と一致せず，「運動部離れ」の原因になっているのではないかと思われる。

2）運動部のイメージ

表1は入学当時と現在の運動部のイメージをたずねたものである。入学当時については「練習が厳しい」「上下関係が厳しい」「時間が拘束される」というような運動部に加入しにくいイメージがあるのに対し，現在においては「練習が厳しい」「上下関係が厳しい」というような運動部へ加入しにくいイメージは減少しつつある。

両者を比較すると，入学当時では，Bの人の方に「仲間が出来る」「身体が鍛えられる」というような運動部の活動を通して得られるメリットが指摘され，運動部に関してプラスのイメージを持つ者が多いといえる。

表1　運動部のイメージ　（%）

項　目	入学当時		現　在	
	A	B	A	B
練習が厳しい	38.2	36.8	28.1	33.3
上下関係が厳しい	42.7	39.1	33.7	24.1
時間が拘束される	30.3	28.7	46.1	37.9
仲間が出来る	15.7	31.0	14.6	41.4
身体が鍛えられる	13.5	25.3	20.2	25.3
お金がかかる	13.5	9.2	24.7	21.8
技術レベルが高い	3.4	9.2	5.6	6.9
勝利志向である	5.6	1.1	9.0	2.3
就職がよい	5.6	2.3	4.5	0.0
その他	5.6	2.3	4.5	3.4
無回答	2.2	1.1	3.4	1.1

（重答）

現在のイメージについて，Aの方では「練習が厳しい」が減少し，「時間が拘束される」が増加している。一方Bの方では「上下関係が厳しい」が減少し，「仲間が出来る」が増加している。両者のイメージの比較を通していわれることは，Bの人の方にどちらかといえば運動部に対してプラスのイメージをえがいている者が多く，Aの人の方に「運動部離れ」をおこすマイナスのイメージをえがいている者が多いといえる。つまり若者の行動様式が旧人類から新人類へ変化しつつあることは，大学生の「運動部離れ」の現象を出現させているものと思われる。

表2は運動部のイメージを運動部加入者と同好会加入者に分けて示したものである。入学当時，運動部加入者は「仲間が出来る」「身体が鍛えられる」のように運動部加入にとってプラスのイメージをもっているのに対し，同好会加入者は「練習が厳しい」「時間が拘束される」などのマイナスのイメージが強いことが理解される。

表2　運動部のイメージ
（運動部加入者と同好会加入者）　（%）

項　目	入学当時		現　在	
	運動部	同好会	運動部	同好会
練習が厳しい	41.5	57.4	22.8	44.4
上下関係が厳しい	29.8	30.2	15.1	23.1
時間が拘束される	24.0	46.2	33.5	50.9
仲間が出来る	40.3	24.3	57.2	28.4
身体が鍛えられる	29.8	6.5	29.5	13.6
お金がかかる	7.1	8.9	25.8	18.3
技術レベルが高い	5.5	10.7	7.4	11.2
勝利志向である	3.1	3.6	3.1	4.7
就職がよい	3.4	0.0	1.1	0.0
その他	1.8	0.6	2.2	0.0
無回答	0.0	0.6	0.3	1.8

（重答）

イメージの変化については，運動部加入

者，同好会加入者とも「練習が厳しい」「上下関係が厳しい」のマイナスイメージが大幅に減少し，特にこの傾向は運動部加入者の方に顕著にみられ，「運動部の同好会化」がみられる。また「仲間が出来る」というプラスのイメージは運動部加入者に57.2%もみられ，運動部継続の要因になっている。両者の比較から「運動部離れ」をおこして同好会へ加入している人は運動部に対してマイナスのイメージを多くもっているといえる。

しかし，イメージの変化からみると運動部へ加入しやすくなっているにもかかわらず加入しないのは，束縛をきらう新人類的思考がはたらいており，大学の運動部のあり方を考えていく時期に来ているのではないかと思われる。

3）同好会のイメージ

表3は入学当時と現在の同好会のイメージをたずねたものである。入学当時の同好会のイメージは「楽しみ志向である」「練習が楽である」「コンパが多い」などの運動部よりも同好会へ入りやすいイメージである。現在のイメージでは「楽しみ志向である」「練習が楽である」が減少し，「目的がはっきりしない」が増加している。つまり同好会加入を促すプラスのイメージの減少がみられる。

表3　同好会のイメージ　（%）

項　目	入学当時		現　在	
	A	B	A	B
楽しみ志向である	44.9	65.5	47.2	52.9
練習が楽である	40.4	40.2	32.6	41.4
コンパが多い	30.3	21.8	25.8	24.1
時間が拘束されない	14.6	9.2	14.6	12.6
目的がはっきりしない	13.5	19.5	24.7	14.9
上下関係がゆるやか	10.1	6.9	9.0	18.4
異性が多い	6.7	6.9	6.7	6.9
まとまりがない	6.7	2.3	10.1	9.2
技術が上達しない	2.2	6.9	4.5	6.9
その他	5.6	4.6	6.7	8.0
無回答	3.4	3.5	4.5	1.1

（重答）

両者の比較では，入学当時Bの人は「楽しみ志向である」「目的がはっきりしない」が多く，Aの人は「コンパが多い」「時間が拘束されない」が多い。現在でも，Bの人は「楽しみ志向である」「練習が楽である」「上下関係がゆるやかである」が多いのに対し，Aの人は「目的がはっきりしない」が多い。つまり，Aの人の方が同好会についてマイナスのイメージをもつ人が多く，「同好会離れ」のトレンドを示しているといえる。

次に同好会のイメージを同好会加入者とサークル（運動部・同好会・文化部）未加入者とを比較したのが表4である。

入学当時，同好会加入者はサークル未加入者に比べて「楽しみ志向である」「練習が楽である」「時間が拘束されない」「上下関係がゆるやか」が多く，「コンパが多い」を除けばプラスのイメージをえがいている。

現在でも同好会加入者の方がサークル未加入者よりも同好会にプラスのイメージをえがいているが，「上下関係がゆるやか」が増加した以外は，「楽しみ志向である」「練習が楽である」「時間が拘束されない」が減少し，「まとまりがない」「目的がはっき

表4　同好会のイメージ
（同好会加入者とサークル未加入者）　（%）

項　目	入学当時		現　在	
	同好会	未加入	同好会	未加入
楽しみ志向である	67.5	53.7	58.6	53.0
練習が楽である	39.1	36.0	26.6	26.1
コンパが多い	20.7	36.4	12.4	35.3
時間が拘束されない	35.5	9.9	29.6	13.8
目的がはっきりしない	4.7	15.5	11.2	22.3
上下関係がゆるやか	13.6	9.5	25.4	8.5
異性が多い	5.3	2.5	2.6	2.5
まとまりがない	0.6	3.9	10.1	9.9
技術が上達しない	1.8	3.2	10.1	3.2
その他	1.2	8.1	10.7	13.1
無回答	1.2	6.4	1.2	7.1

（重答）

りしない」「技術が上達しない」が増加するなど，同好会のマイナスイメージを指摘する者が多くなっているといえる。

つまり期待して加入した同好会も実際に活動してみるとマイナスのイメージに変わりつつあるといえる。このことと，入学当時同好会に対してマイナスイメージをいだいていたサークル未加入者のことを考えると，「楽しみ志向」が強いと言われる同好会にも入りたくないと思っている者の存在がクローズアップされ，新たな「同好会離れ」という現象がおこりつつあると推察される。

4）スポーツ価値意識

スポーツ価値意識とは，個々人のスポーツに対する好ましいと思われる「考え方」や「やり方」を総称したものである。スポーツ価値意識について，上杉正幸[6]は考え方における「手段性と自己目的性」と，やり方における「禁欲性と即時性」とに分類している。スポーツ行動における手段性とは，スポーツそのものにおもしろさを味わうことの他に何かの目的（例えば，健康増進・人間形成・仲間づくりなど）をもって行うことが大切であるという考え方である。また禁欲性とは厳しい練習の中で自分を鍛えようとするのに対して，即時性は現在の能力にあわせてその場で気軽に行おうとするやり方である。この二つの立場をクロスさせて，スポーツ価値意識の四つの類型化（世俗内禁欲型，アゴン型，レクリエーション型，レジャー型）を行ったのが図2である。

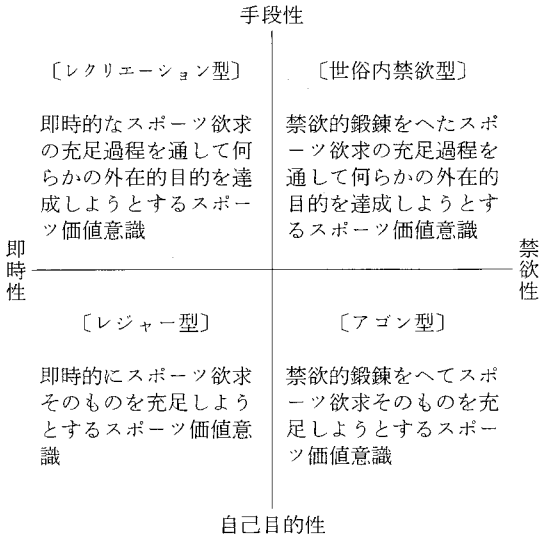

図2　スポーツ価値意識の四類型

図3は現在のスポーツ価値意識をあらわしたものである。全体的にみると「レジャー型」が40.1％と最も多く，次いで「レクリエーション型」が25.6％となっており，自分の能力にあわせて気軽に行なおうとする者が65.7％も占めている。一方，従来運動部加入者に多くみられた「アゴン型」は21.3％，「世俗内禁欲型」は13.0％と少なく，「運動部離れ」のトレンドがみられる。

両者の比較では，「レジャー型」と「レクリエーション型」を合わせると，Aの人は70.7％，Bの人は53.9％でありAの人に「運動部離れ」のトレンドがより多くみられる。また運動部加入者に多くみられるス

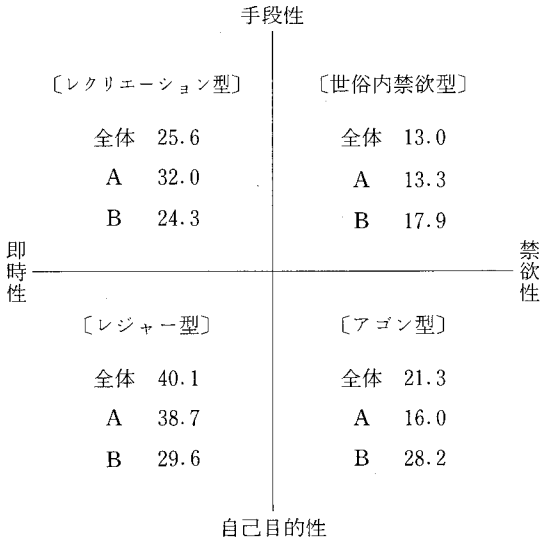

図3　現在のスポーツ価値意識（%）

ポーツ価値意識の「世俗内禁欲型」と「アゴン型」を比べると，Bの人の場合，「アゴン型」が28.2%と2番目に多い。このことはスポーツ行動において手段的よりも自己目的的にスポーツをする人が増えていることを意味しているといえる。

図4は運動部加入者と同好会加入者のスポーツ価値意識を過去[7]（1983年）と現在（1990年）に分けて聞いた結果である。

過去においては，運動部加入者の場合，「世俗内禁欲型」42.8%，「アゴン型」36.2%であるのに対し，同好会加入者の場合，「レクリエーション型」42.5%，「レジャー型」25.7%と，運動部加入者と同好会加入者に特有のスポーツ価値意識が明確にあらわれていたといえる。

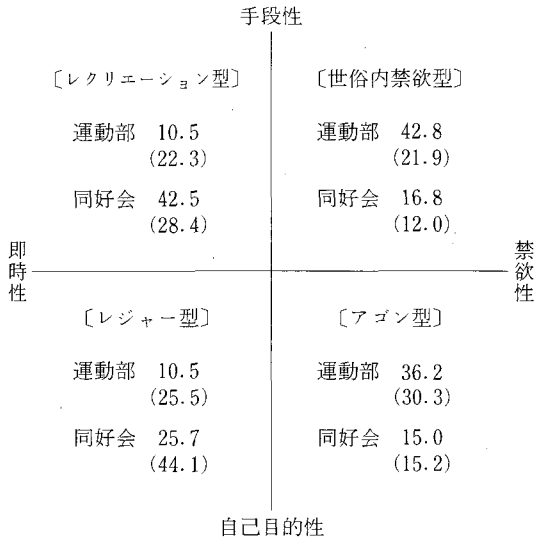

図4　過去と現在のスポーツ価値意識（%）
（　）内は現在のスポーツ価値意識

しかしながら現在のスポーツ価値意識をみると，運動部加入者の場合，「世俗内禁欲型」が20.9%も減少し，「レクリエーション型」と「レジャー型」を合わせると26.8%も増加している。このことは「運動部の同好会化」のトレンドをあらわしているものと推察される。

一方同好会加入者の場合，「世俗内禁欲型」と「アゴン型」はあまり変化はみられないが，「レクリエーション型」が14.1%減少し，「レジャー型」が18.7%も増加している。つまりスポーツを手段的にとらえるよりも自己目的的にとらえ，スポーツそのものの面白さを味わう人の増加がみられる。

人との交流よりもスポーツを個人で楽しむ志向の増加を促す「レジャー型」のスポーツ価値意識の増加は「同好会離れ」のトレンドに発展していく可能性を秘めているといえる。また「レジャー型」のスポーツ価値意識は「しんどいことはしたくない」「人間関係はあまり得意でない」の行動様式をもつ新人類に一番マッチしたものであり，これからも「レジャー型」のスポーツ価値意識が増えてくるものと予測される。

5）将来のスポーツ活動

①スポーツの種類

表5は将来実施してみたいスポーツ種目を示したものである。全体的にみると，上位10種目では，スキーが最も多く，次いでゴルフ，バイク，スキューバーダイビング，テニス，スカイダイビング，射撃，ジェットスキー，ハングライダー，野球の順になっている。

両者の比較では，順位の差はあれ，上位は学校体育の種目以外のものが多く占めており，差はあまりみられない。このように実施を希望するスポーツは，ほぼ全体に共通して同種なものといえる。

次に上位10種目にあげられているスポーツの特徴をあげてみると，第一に学校体育や地域スポーツで実施されている種目は少なく，ほとんどが金のかかる商業スポーツである。第二に自然の中で行われる「克服スポーツ」が多く，その中でもカイヨワの「イリンクス（眩暈）」[8]

の要素をもつものが多い。第三に活動形態が集団レベルよりも個人レベルで実施するスポーツ種目が多い。

②実施の理由

実施したい理由を示したのが表6である。全体的にみると「興味があるから」が圧倒的に多く，次いで「解放感が味わえるから」「異次体験ができるから」「健康・体力づくり」「自然に親しめるから」「仲間づくり」と続いている。

「興味があるから」と答えた人が8割もいるのは，上位のスポーツはいずれもトレンディなスポーツ種目であり，マスメディアの影響を強く受けているものと思われる。「解放感が味わえるから」「異次体験ができるから」は種目の多くが自然の中で実施されるものであり，日常生活とかけ離れた非日常性が経験できるために人気があるのではないか。しかし，地域スポーツの実施理由の中でよく指摘されている「健康・体力づくり」や「仲間づくり」はそれほど多くない。

両者を比較すると，両者ともほぼ全体と同様の傾向がみられるが，Bの人においては，「健康・体力づくり」と「仲間づくり」が上まわっている。その理由として，水泳を除けば，Bの人の方が学校体育や地域スポーツの中で行われるスポーツ種目（テニス，野球，格技，ソフトボール，サッカー，バレーボール，バドミントン）を希望する者が多いために差があらわれたのではないかと思われる。

このような若者の新しいスポーツトレンドが出現した社会的背景を探ってみると，第一に情報化社会の進展があると考えられる。希望理由のトップにあげられた「興味があるから」の〝興味〟は多分にマスメディアの影響があると思われ，特に商業スポーツのコマーシャル等は，若者の心を引きつけていると思われる。

第二に余暇時代の到来をむかえて，仕事志向よりも余暇志向の若者が増えたからだと考えられる。現在の日本はバルブ経済の中で大型リゾートが推進され，そのリゾート地で実施されるスポーツ種目に若者があこがれたからだと思われる。

第三に若者の行動様式が集団から個人へと変化したからだと考えられる。現在の若者にとって集団に属することは，束縛感を伴う苦痛なことであり，それは大学生の「同好会離れ」という新たな現象を生み，大学のスポーツクラブに加入せず，「好きなことを，好きな時に，好きなだけやる」という取り組み方が若者に好まれはじめているからだと思われる。

第四に若者のスポーツ価値意識が楽しみ志向に変化していることであろう。中でも「レジャー

表5　スポーツの種類　（%）

項　目	A	B
1．スキー	27.0	27.6
2．ゴルフ	21.3	21.8
3．バイク	33.7	18.4
4．スキューバーダイビング	14.6	25.3
5．テニス	7.9	19.5
6．スカイダイビング	13.5	17.2
7．射撃	16.9	12.6
8．ジェットスキー	14.6	6.9
9．ハングライダー	7.9	13.8
10．野球	6.7	9.2
11．乗馬	7.9	4.6
12．格技	4.5	9.2
13．ソフトボール	3.4	5.7
14．サッカー	2.2	6.9
15．トローリング	11.2	4.6
16．マウンテンバイク	7.9	3.4
17．バレーボール	4.5	4.6
18．ウィンドサーフィン	4.5	5.7
19．水泳	6.7	5.7
20．バドミントン	2.2	4.6
その他	40.3	42.3
無回答	2.2	0.0

（重答）

表6　実施の理由　（%）

項　目	A	B
興味があるから	78.7	82.8
解放感が味わえるから	24.7	20.7
異次体験ができるから	19.1	16.1
健康・体力づくり	15.7	26.4
自然に親しめるから	16.9	17.2
仲間づくり	3.4	19.5
視野が広がるから	7.9	13.8
経験があるから	10.1	14.9
手軽にできるから	10.1	6.9
おしゃれだから	11.2	5.7
話題性があるから	6.7	3.4
一人でできるから	4.5	2.3
その他	6.7	6.8
無回答	4.5	1.1

（重答）

型」のスポーツ価値意識が増加している傾向はこれらの現象に拍車をかけているといえる。

第五に経済的な豊かさが考えられる。現代の若者は，生活の豊かさと便利さの中で快適な生き方をしてきており，「高級化・個性化・差別化」を追求する〝新人類〟と呼ばれる若者を生みだした。彼らの行動様式がこれらのスポーツ種目とマッチしたのではあるまいか。

大学生を新人類と旧人類に分けて分析を進めてきたが，旧人類といわれる人も，団塊の世代からみると新人類にみえ，これがスポーツ種目選択のうえで両者の差異のなさを生み出したのではあるまいか。

2．大学生活

1）日常生活の優先順位

表7は日常生活の中で何を優先するのかを示したものである。全体的にみると「学校の授業」が最も多く，「自分の時間」「同性の友人との交際」「サークル活動」「趣味活動」の順になっている。

両者を比較すると，Aの人は「自分の時間」と「趣味活動」が多く，プライベートな時間を優先する者が多いのに対し，Bの人は「学校の授業」「同性の友人との交際」「サークル活動」など仲間との交流を優先する者が多い。ここでもAの人の個人志向とBの人の集団志向の傾向がみられる。

表7　日常生活の優先順位　（%）

項　目	A	B
学校の授業	62.9	80.5
自分の時間	64.0	34.5
同性の友人との交際	34.8	44.8
サークル活動	31.5	54.0
趣味活動	37.1	19.5
アルバイト	21.3	31.0
異性の友人との交際	15.7	11.5
先輩とのつきあい	3.4	8.0
その他	3.4	3.4

（重答）

2）大学生活の充実度

表8は大学生活の充実度を示したものである。「充実している」と「だいたい充実している」を合計すると，Aの人は40.5%，Bの人は59.9%が充実していると解答している。Bの人がAの人よりも20%も充実度が高いのは，日常生活の中で学校の授業に真面目に取り組み，サークル活動への参加を通して幅広い友人関係を持つ者が多いことからだと推察される。

表8　大学生活の充実度　（%）

項　目	A	B
充実している	13.5	13.8
だいたい充実している	27.0	46.1
あまり充実していない	41.5	33.3
充実していない	18.0	5.7
無回答	0.0	1.1

人間関係がうまくいかない若者の増加をなぜ危惧するかというと，未来学者のアルビン・トフラーは『未来の衝撃』の中で「未来社会では，人間関係を維持することが重要になるにもかかわらず，それが困難になるから，人間関係の指導が，未来社会の教育として重要である」[9]ことを指摘している。また，ジョン・ネイスビッツは『メガトレンド』の中で，情報化社会における「ハイ・テック（High Tech）」と「ハイ・タッチ（High Touch）」の調和を強調し，「ハイ・テック」という技術が発展すればするほど，「ハイ・タッチ」という人間性の回復を主張した。[10] この意味からも，大学生がサークル活動（運動部，同好会）へ加入し人間関係を豊かにすることは，これからの時代を生きていくうえで必要なことではあるまいか。

3）生き方

表9は自分に一番近い「生き方」をあらわしたものであり，6つの生き方のタイプを設定した。[11] [12] このうち上の3つが「私」重視の生き方であり，下の3つが「公」重視の生き方で

ある。さらに，それぞれに，改革，保持，逃避といった現状への構えが含まれている。「自己実現型」は「私」重視で改革志向，「社会改革型」は「公」重視の改革志向である。同様に，「生活享受型」と「現状保持型」はそれぞれの保持志向であり，「逃避安逸型」と「達観修養型」は逃避志向である。

表9　生き方　(%)

項　目	A	B
自己実現型	56.1	12.6
生活享受型	19.1	32.3
逃避安逸型	18.0	23.0
社会改革型	3.4	21.8
現状保持型	0.0	4.6
達観修養型	3.4	5.7

質問文は次のような文章である。

〔「私」重視の生き方〕

①自己実現型…世間の目を気にせず，自分のやりたいことを楽しむ

②生活享受型…現状に甘んじ，与えられた範囲で，自分の生活を楽しむ

③逃避安逸型…世の中のことはなりゆきにまかせて，その日を平穏にすごす

〔「公」重視の生き方〕

④社会改革型…よりよい社会の実現をめざして，積極的に努力する

⑤現状保持型…いまの社会を大切にし，それを守ることに努める

⑥達観修養型…社会とのかかわりをなるべく避け，ひたすら修業にはげむ

全体的にみると「私」重視の生き方をする人が多くみられる。

両者を比較すると，「私」重視の生き方をする人は，Aの場合93.2%，Bの場合67.9%であり，Aの人はほとんどが「私」重視の生き方をしているといえる。

また「私」重視の生き方では，Aの人は「自己実現型」が多く，Bの人は「生活享受型」と「逃避安逸型」が多い。一方「公」重視の生き方ではBの人の方に「社会改革型」が多い。つまり，Aの人は社会とは無関係なところで自分の生活を楽しく過ごすという生き方をしている者が多いのに対し，Bの人は社会とのかかわりをもった生き方をしている者が多い傾向がみられる。

Ⅳ．結　　論

(1)　大学生のスポーツトレンドとして「運動部離れ」と「同好会離れ」が進んでおり，新人類（Aの者）が旧人類（Bの者）よりもその傾向が顕著にみられる。

(2)　大学生のもう一つのスポーツトレンドは大学生のスポーツ志向の変化である。それは大学生の行動様式が集団から個人に変化するにつれて，集団よりも個人で実施する野外での商業スポーツに変わりつつある。

(3)　新人類の大学生活は旧人類ほど充実していない。人間関係を深める意味からも大学のスポーツライフは大切であり，一般体育における新しいスポーツの導入や新しいスポーツクラブ像の構築が望まれる。

〈参考文献〉

1）　総務庁青少年対策本部編　「平成元年度版青少年白書」　大蔵省印刷局　1990

2）　筑紫哲也編　「若者たちの神々」　朝日新聞社　1984

3）　中野収「まるで異星人」　有斐閣　1984
4）　ジョン・ネイスビッツ　「メガトレンド」　三笠書房　1984
5）　長谷川慶太郎　「麻雀・カラオケ・ゴルフは，おやめなさい」　ＰＨＰ研究所　1989
6）　上杉正幸　「スポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析－一流競技参与者と地域スポーツ参与者の比較－」　体育・スポーツ社会学研究会編「スポーツの多様性をさぐる」　道和書院　1990
7）　竹下貴「大学運動部員と同好会員のスポーツ価値意識に関する研究」　昭和58年度　愛媛大学教育学部保健体育科卒業研究　1983
8）　ロジェ・カイヨワ　「遊びと人間」　講談社　1973
9）　アルビン・トフラー　「未来の衝撃」　実業之日本社　1976
10）　前掲書４）
11）　秋山登代子　「現代青年の生きがいと生き方」　吉田昇，門脇厚司，児島和人編　「現代青年の意識と行動」　日本放送出版会　ｐｐ．165－168　1978
12）　田中治治　「社会参加と青少年」　高橋勇悦編　「青年そして都市・空間・情報－その危機的状況への対応－」　恒星社厚生閣　ｐｐ．49－51　1987